

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720047

研究課題名(和文) ヴィヴァリーニ工房とその受容 15世紀ヴェネツィアにおける美術と信心

研究課題名(英文) Research on the Production and Cooperation of Vivarini Workshop in Renaissance Venice

研究代表者

佐々木 千佳 (SASAKI, Chika)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：50400198

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主としてベッリーニ工房とヴィヴァリーニ工房という15世紀を通じて隆盛を誇った両工房が、異なる制作の様相をみせはじめた1470年代を軸に、その前後に制作した祭壇画と小規模板絵をヴィヴァリーニ一族の作品を中心に調査・分析した。その際各地に現存する、同信会によって注文された祭壇画を中心に同時代資料の読解を進め、聖母子から派生した中心的な図像がヴィヴァリーニ工房でどのように制作されたかという諸事例について詳細に分析した。その結果、図像系譜に応じた画家工房への注文の際には一定の法則性が観察されると共に、その地域的特性を浮かびあがらせることができた。

研究成果の概要(英文)：During research, I tried to investigate documents and visual sources on the altar piece and small-scale painting produced around the 1470s, focusing on the works of Vivarini family. Based on the 1470s, the Bellini studio and the Vivarini studio, which were the ascendant all through the fifteenth century, started to show different kinds of their productions. In doing so, I tried to read documents from that age, mainly on the altarpiece ordered by scuola, existing in various places in Veneto and tried to analyze various examples of how the main iconography deriving from Virgin with Child was produced in the Vivarini studio. Through analyzing this assembled data, I could recognize a certain pattern ordering to the artists' studio depending on iconographic genealogy and highlight the local character in this process.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：ヴェネツィア 工房

1. 研究開始当初の背景

(1) 15世紀初頭から台頭し、ムラーノ派とも呼ばれたヴィヴァリーニ族(アントニオ・バルトロメオ、アルヴィーゼ)は、簡素な色彩でゴシック様式の祭壇画などを制作する工房を営んだ。従来の美術史研究では、柔らかい色調と調和のとれた造形を生み出した、ジョヴァンニ・ベッリーニやアントネッロ・ダ・メッシーナのルネッサンス様式の登場にともない、ヴィヴァリーニ様式は次第に時代遅れとなったと説明されてきた。すなわち、装飾性に富む線を主体とするゴシック美術の要素を捨て切れずベッリーニ様式に凌駕され、近世ルネッサンスへ連動する潮流から外れたという評価である。進歩史観的な美術史学の枠組に留められた、ヴィヴァリーニ工房に対するこうした批評の図式は、これまで組み換えられることはなかった。

(2) ヴィヴァリーニ工房についての研究は、地理的・政治経済的影響による様式的展開を辿ることが中心であり、個別主題へのアプローチや、祭壇画における様式や媒体についての研究の中で部分的に言及されてはきたものの、その制作の実態を社会背景との連繋において考察した研究は皆無であった。こうした時代における画家の社会的役割は、地元根差していた画家を含めて包括的に位置づけられなければならない。つまり、ベッリーニの先駆的な様式と対峙しても、15世紀前半までの古い様式や主題タイプを保ち続けた工房の画家達と、それを求めた注文主の活動に焦点をあて、同時代の社会における美術動向の中に再統合する必要がある。一見対極にある両者でも、絵画が信仰の対象として具現化していた時代においては、受容者側の要求に応えるという同質の基盤に立っていたとみられ、またそれゆえに共存していたと考えられた。

2. 研究の目的

(1) 15世紀のヴェネツィア絵画の祖であるベッリーニ工房と並び称されたヴィヴァリーニ工房は、ムラーノ島を拠点に大規模な経営を行った。しかし、ヴェネツィア美術の本流となり多くの弟子を輩出したジョヴァンニ・ベッリーニと対置され、ヴィヴァリーニにはゴシック様式を色濃く残す時代遅れの画家という一面的評価が与えられてきた。それに対し本研究は、地元の聖堂や信心会に注文された祭壇画の調査を通じて、個々の画派に還元されない中世的信心を反映する、作品の社会的文脈を解明する。

(2) 画家の活動を時代の相とともに包括的に捉えるという本研究の視点は、ヴィヴァリーニ研究の欠を埋めるのみならず、ヴェネツィア美術の源流を再構築することにつながる。とくに盛期ルネッサンスへと連動

する潮流を再考することで、ヴェネツィア美術にとどまらない、ルネッサンスおよび美術史研究全体の見直しがはかれる。また画家への注文は、依頼主による主題の選択に応じて行われるため、ヴィヴァリーニ工房とその影響下にある画家たちの作品を位置づけ直すために、まずその系譜を探る必要がある。そこで広範な作品分析に基づき、主題に準じる図像の機能を信仰者との関係からひとしく抽出し、彼らが属していた制作環境に応じた主題の系譜を明らかにする。また主題の持つ宗教的機能をふまえ、ヴィヴァリーニ工房作品が受容された環境を解明する。研究全体を通じて、ジョヴァンニ・ベッリーニによって主導され、16世紀に花開いたというヴェネツィアの「ルネッサンス」美術観の再考することを目的とする。加えて、主題の機能に応じてベッリーニと共存した同工房の実態を復元し、当時の人々が共有していた図像系譜を解明することで新たな15世紀のルネッサンス像を構築する。

3. 研究の方法

(1) 両工房が異なる制作の様相をみせはじめる1470年代を軸とし、その前後に制作された祭壇画と小規模板絵のデータを網羅的に収集し、主題別に整理する。

(2) ヴェネツィアをはじめ各地に現存する同信会によって注文された祭壇画を中心に、同時代資料の読解を通じ、聖会話を中心とする図像が制作され、受容された環境を復元する。実物についての現地調査を行い、祭壇画の現在の設置状況や周辺部、細部も含め写真撮影により記録する。ヴェネツィアの聖堂を中心に、現在ボローニャ国立美術館およびミラノのブレラ美術館にある祭壇画を含め、各7日程度の調査を実施する。調査予定項目は以下の通り。1.アントニオ・ヴィヴァリーニとその協力者ジョヴァンニ・ダレマーニャの各祭壇画、2.ヤコポ・ベッリーニとジョヴァンニおよびジェンティーレ・ベッリーニが工房の体制のもとで制作した各祭壇画、3.バルトロメオ・ヴィヴァリーニによる1470年代の祭壇画、4.ジョヴァンニ・ベッリーニの3と同主題の各作品、5.アルヴィーゼ・ヴィヴァリーニとその弟子であるムラーノ派画家たち(レオナルド・ボルドリーニ、クイリツィオ・ダ・ムラーノ、マルコ・バザイティ)による各作品。

(3) (1)~(2)のデータ分析をふまえたうえで、幼児キリストを礼拝する聖母 ピエタの主題を中心に、図像内容と宗教的機能の関係について体系的に解明する。

(4) 上記主題について、ヴェネツィアで信仰を集めたイコン《ニコペイアの聖母》との関連から図像の派生状況について調査し、多

様な図像形成の過程と思想背景を浮き彫りにする。

(5) 画像資料の分析を踏まえ、バルトロメオおよびアルヴィーゼ・ヴィヴァリーニ、またその弟子たちが描いた他主題作品の制作と受容環境を分析し、当時の社会的コンテクストから導き出される宗教的意味を解明する。工房が果たした社会的役割をより立体的に分析し、主題毎のデータを整理する。

4. 研究成果

(1) 数多く制作されたベッリーニの聖母子画に見られる型が形成された過程、ならびに、それらがいかなる原理のもとで反復されたかを受容者が求めた宗教性という観点から論じた。画家が伝統的なビザンティン美術にルネサンス的な知の新潮流の趣味を融合する技を備えていた故に受容されたことを、各モチーフや同時代資料から明らかにした。とくに従来の研究では様式のみが対象となってきたヴィヴァリーニ(ムラーノ派全般)工房作品について、主題の系譜と宗教的機能の関連を明らかにした。古い形式を保持した職人画家としてのヴィヴァリーニ工房が受容者側のコンテクストに適合して制作していたことを、個別研究を踏まえて同時代の美術動向全体の中に位置づけることができた。

(2) 事例研究に以下が挙げられる。まずバルトロメオ・ヴィヴァリーニは、共同制作者ジョヴァンニ・ダレマーニャが1450年に亡くなって以降も兄と共同制作を行っていたが、70年代頃からは単独の作品が多くなる。その後、ベッリーニ作品からモチーフや構図を積極的に取り入れるようになるが、ベッリーニが《ペーザロ祭壇画》(1475年頃)を制作した後は、ルネサンス様式を採用することはなくなっていく。この背景について、1470年代のバルトロメオの活動を注文主との関係から再考を試みた。とくに《聖アンブロシウスの祭壇画》(ヴェネツィア、アカデミア美術館)に描かれた 聖会話 主題について、注文主である 石材職人の同信会 との関係から、バルトロメオが同信会によって選択された状況と図像の選択を、契約書をはじめとする一次史料の読解を通して明らかにすることができた。さらに、 幼児キリストを礼拝する聖母 の主題については、バルトロメオおよびアルヴィーゼ・ヴィヴァリーニ他、工房の画家たちによって多数制作されている。この主題は、バルトロメオが1464年に制作した《モロシーニの祭壇画》(ヴェネツィア、アカデミア美術館)の多翼祭壇画中央パネル 礼拝する聖母像 を端緒とし、半身像のみで描かれた 礼拝する聖母像 や単一パーラに描かれるなどのヴァリエーションが制作された。本主題の図像系譜を辿り、ヴェネツィアで同主題が繰り返し描かれた宗教的背景について、一次史料の読解を通じて

再構築することができた。贖宥概念と密接に結び付く単独の ピエタ は、ヴェネツィアを中心に北イタリアに広まり、ヴィヴァリーニ工房で多数制作された。 幼児キリストを礼拝する聖母 との関連から、この主題が画面において聖母図像と結びつき、聖母が礼拝する姿で表わされるようになったことが確認された。なかでも1475年頃から活発に提唱されるようになる都市ヴェネツィアを聖化しようとする当時の思想、ならびに祈念像としての性格とのかかわりから分析を行った。なかでも、コンスタンティノープルに由来し、中世以降篤い信仰を集めていたアイコン《ニコペイアの聖母》(ヴェネツィア、サン・マルコ聖堂)と関わる、ヴェネツィアの聖母信仰との思想的結びつきを指摘した。ここに端を発する系譜からは、ヴィヴァリーニとベッリーニの両工房で異なる発展を辿ったことが確認された。両工房では、宗教的機能に応じて委託される主題の住み分けが行われていた可能性について、契約書や証書の一次史料を通じて制作の場の復元に努めた。

(3) 研究期間全体を通じて、15世紀という中世と近世のはざまの時代における信心に対応した美術の様相を示し、そこにおいてヴィヴァリーニ工房が果たした造形面での社会的役割を解明した。そのなかで、ヴィヴァリーニ工房の作品の受容者には、質的に一定で、特定の主題を繰り返し描くことのできる画家への期待があったことが確認された。それは特定の図像の反復や意識的な選択の数々に顕著に表れており、従来別系統として論じられてきた二流派は、受容者に応じて確実に住み分け、また補完しあう関係にあったことを浮かび上がらせることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

佐々木千佳、「型と変容 15世紀ヴェネツィア美術家工房の聖母子画制作とその受容」、第62回美学会全国大会、2011年10月15日、東北大学

[図書](計2件)

上村清雄編、出佳奈子、佐々木千佳、吉住磨子、新保淳乃、大野陽子、ありな書房、聴覚のイコノグラフィア 楽器・音楽家・音楽文化、2013、31-68

上村清雄編、出佳奈子、佐々木千佳、新保淳乃、吉住磨子、林羊歯代、ありな書房、知識のイコノグラフィア 文字・書籍・書斎、2011、43-71

〔その他〕(計2件)

フィールドノート トルチェッロ
の聖母 都市の記憶、空間の記憶、
岩田書院、空間史学叢書1 痕跡
と叙述、空間史学研究会編

2013、203-213

展覧会図録(作品解説・作品解説翻
訳)国立西洋美術館、ベルリン国
立美術館展 学べるヨーロッパ美
術の400年、2012

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐々木 千佳 (SASAKI, Chika)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：50400198